

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 由良山周辺を訪ねる

講師 大嶋和則（高松市文化財専門員）

平成23年9月25日（日）

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 由良山

由良山は高松平野南部の独立峰で、標高一二〇・四メートル、周囲三キロメートルです。今から七〇〇万年以上前の火山活動によってその姿を現しています。黒雲母安山岩からなり、柱状節理が見られます。

また、由良山は地震にも「揺らん山」だと言われています。由良山の麓の人たちの間では、由良山周辺は地震の際にあまり揺れないという言い伝えがあり、安政や昭和の南海地震の際にも被害が少なかったと言われています。揺れない山は「おじゃはん」が七巻半もしていて、その尾は蔵王神社ざおうまで延びているという伝説があります。「おじゃはん」とは大きな龍で、水の神様です。

2 清水神社

景行天皇五四年の創祀で、古くは好井社よしいと称され、山頂のやや東にあったとされます。景行天皇の皇子で、讃岐国造くじのみやつこの始祖である神櫛王かみぐしのおうを祀るとされています。永祿三年（一五六〇）に田井城主長尾清長が東側中腹に復興し、由良社と改めたとされています。

江戸時代には藩主松平氏の尊崇厚く、
国中十ヶ寺で祈願をしても雨が降らない
時は、当社で祈願したとされます。「甕洗
い神事」が有名ですが、それとは別に、
「お火上げ神事」と呼ばれる雨乞い行事
があります。むかしは毎年旧暦の五月三
〇日の夜、多くの里人が雨乞いと五穀豊
穰を祈りながら由良山頂上の竜王社を目
指し、手に手に松明をかざして上りまし
た。竜王社に着くと神官が大祓はらえの儀式を
行い、それが終わると集められた青松葉
に火がつけられ、赤々と天をも焦がす大
炎をつくりました。現在は山頂での焚き
火は取りやめています。八月第一土曜
日の夜に神事が行われています。



清水神社

3 甕塚と上御盥跡

かめづか かみみたらいあと

むかし、清水神社では祭礼には甕一二口で御神酒を作ってお供えをしていたと言われています。別当寺である自性院じしやういんの記録によれば、承和八年（八四一）は大旱魃かんぱつで、国司の命により雨乞いを行うことになりました。雨乞い神事の際に神櫛王ゆかりの甕を使つて祈つたところ大成功したと言われています。その後、天正年間（一五七三〜九二）に長宗我部元親ちやうそかべもとちかの兵火に会い、一二個の甕のうち三個を残して社殿は焼失したとされます。残った甕を里人たちは大切に
お守りしていましたが、今度は風水害にあつて一個を破損してしまい、残った二個の甕を本殿南側の甕塚に納め、再建した清水神社の本殿床下に破損した甕を埋めました。雨乞いの際に、上御盥かみみたらい、中御盥なかみたらい、下御盥しもみたらいから神水を取り、甕を洗えば必ず雨を得ましたが、甕を洗ったものは必ず亡くなるという伝承があります。昭和一四年（一九三九）の夏の大旱魃に際して、甕洗いを行ったのが最



甕塚

後ですが、当時甕洗いを行った者は、その後二〇年余り無事でした。その人の話によると、甕は小さなラツキョウ形の甕であつたということです。

4 自性院跡

じしょういん

由良山の山麓清水神社の北東が寺院跡です。雨寶山自性院莊巖寺と称し、西植田町の神内池にあつた真言宗吉國寺の末寺で、本尊は千手観音でした。寺記には、「當寺は大同三年（八〇八）正月伊豫親王に勅して建立あり、好井社の社僧となし、祭田を賜ふ。其の後承和八年（八四一）大旱ありし時、當國の勅使高公輔、眞雅僧正に乞ふて雨を好井社に祈る。」と記されています。眞雅は弘法大師空海の弟です。明治維新の際に院主榊原氏は清水神社の祠職となり、自性院は廃寺になりました。

5 名工内伝秀藏とその作品

ないでんひでぞう

秀藏は西浜村出身で、少年時に牟礼の石工、仁平に弟子入りをして腕を磨き、後に京都に出て絵を学び、三〇歳で讃岐に帰ってきました。安政五年（一八五八）松平頼該よりかね（左近）の紹介で自性院に身を寄せ、由良山の南裾に住居を構えました。代表的な作

品に、呼雲こうれんの龍・逆巻く怒濤どとうと玉取りの龍・正一位清水大明神碑・劍卷龍・浪上の亀（いずれも清水神社）、一力地藏・十河氏累世慰靈碑（いずれも南原墓地）等数多く残されています。ちなみに、かみみたらい上御盥の標柱の龍の彫刻は、長男新蔵の作です。

6 由良山城跡と由良城跡

由良山山頂に由良山城があったとされますが、高射砲台座に伴う成形と採石のため、遺構は確認されていません。また、山の東麓に平時の居館である由良城があったとされます。城主は三谷氏に属した由良遠江守兼光かねみつで、出自ははっきりしません。一説に三谷景久かげひさの弟兼光が由良に領地を得て由良伊豆守を称し、その子兼広が遠江守を名乗ったとも言われます。

永正五年（一五〇八）八月、三谷攻めに向かう香西元定の軍勢二五〇〇人が、由良山城に押し寄せました。城主三谷伊豆守は、弟掃部左衛門かもんが香西氏と縁続きであった



逆巻く怒濤と玉取りの龍

ので、戦うことなく城を開けました。天正一〇年（一五八二）には、長宗我部元親の大軍に対して、城兵三〇〇人余では防ぎきれず、城を捨て敗走したと言われています。

なお、その後讃岐一国を賜った生駒親正は、城地の選定を行う際に由良山をその候補地としましたが、水が乏しいという理由から築城はされませんでした。

7 眞しん楽らく寺とイヌマキ

当寺はもと阿波にありましたが、天正年間（一五七三〜一五九二）、土佐の兵乱にかかり、堂塔坊舎残らず焼失し、住職正仁は当地に来て、宿王山金剛院眞楽寺を開基しました。浄土真宗興正派の寺です。

境内にあるイヌマキは樹高一五メートル、幹周り一・九メートルで、樹齢三〇〇年余と言われており、市の名木に指定されています。



市の名木「イヌマキ」

8 由良南原遺跡

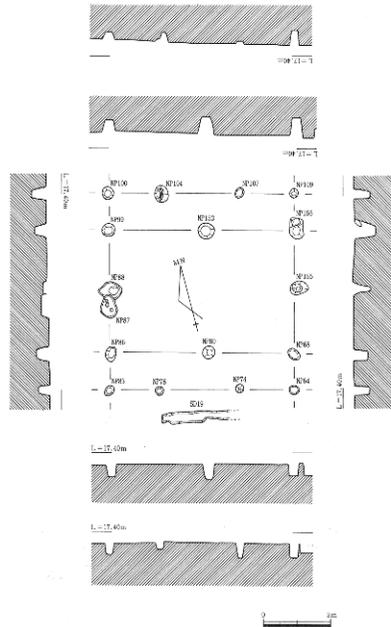
ゆらなんばら

一三世紀を中心とする一二〜一四世紀の集落跡です。掘立柱建物跡五棟、地鎮遺構のほか、灌漑用の幹線水路が検出されています。特に一三世紀中頃の遺構と考えられる東西五・五メートル×南北五・八メートルの掘立柱建物跡は北面と南面に庇を有し、遺跡内最大の規模で、調査地内で瓦が出土していることから小規模な御堂や社等であった可能性が考えられています。

9 蓮勝寺

れんしょうじ

当寺の開基正信は、木田郡の出身で、天文二十三年（一五五四）、現在地に一字を創立して光明山無量寿院と称しました。後に堂宇が次第に老朽化したので、天和三年（一六八三）に再興しました。宝暦六年（一七五六）二月十一日、本山興正寺より寺号を



由良南原遺跡検出掘立柱建物跡

免許され、蓮勝寺と称しました。

境内には、元文二年（一七三七）二月に上田井邑（むら上田井村、現在の由良町のこと）講中が寄進した由良石の手洗石があります。

10 三光堂 さんこうどう

西山崎町に所在する日蓮宗本堯寺の境外末堂です。本堯寺第一九世住職日幸上人が宗学布教伝道に力を注ぎ、出張説教所として建立する動機を作り、明治十二年（一八七九）頃、当地の檀家である三木庄八、三木彌吉によつて建立されました。三光堂と称し、本尊は三光尊像です。昭和五十三年に改築されていますが、堂内には松平頼該（よりかね左近）の筆による「大日月明星天王 鬼子母神 三十番神」のおかけじが祀られています。

11 蔵王神社と旧川島国民学校奉安殿 ざおう

「おじゃはん」の尻尾がここまで伸びているという伝承から「お蛇尾さん」とも呼ばれます。また、通称「ゴンゲンさん」と呼称されていることから、かつては「蔵王

権現社」が本来の呼称であり、蔵王権現が祀られていたと考えられます。神仏混淆の時代には清水神社の末社として、蔵王権現を信仰する密教的色彩の強い神社であったと考えられます。

一方、『香川県神社誌』によると祭神は若宇迦咋神で、宇迦之御魂神・大宜都比売・保食神と同一の神と考えられ、穀物の神や稲の精霊神として通常お稲荷さんの祭神です。明治になり、独立した神社となり若宇迦咋神を奉祭したと考えられます。

なお、当神社の本殿は旧川島国民学校の奉安殿ほうあんでん（天皇と皇后の御真影と教育勅語を納めていた建築物）を移築したものです。

12

腹痛公神薬師堂

はらくわりこうじんやくしどう

俗に、「腹くわり地蔵」と呼ばれ、この付近で無作法なことをすると「腹がくわる」（腹痛をおこすこと）と言われています。病気の治癒を祈願し、あるいは、その平癒



旧川島国民学校奉安殿

に感謝して、この薬師堂に詣る人が多くいました。

堂内には豊島石製の石仏が二体納められています。別の場所ですが、同様の石仏に十河千松丸せんまつまる（十河城主十河存保の子、一五九一年に毒殺される）の墓があり、一六世紀頃の墓標と考えられます。

なお、南東五〇メートルには、「お塚さん」と呼ばれる長方形の高まりに、五輪塔などが寄せ集め

られており、地元では周辺に三木氏が城主を務める田井城があったと言われています。

13 上田井高等小学校跡

明治二十六年（一八九三）五月、山田郡は、高松高等小学校（高松市・山田郡・香川郡の一市二郡の組合立学校）より分離して、坂ノ上村上田井字南原に上田井高等小学校を設立しました。山田郡内の庵治・瀧元・古高松・前田・川添・木太・林・三谷・坂ノ上・十河・東植田・西植田の一二か村の組合立校でした。

高等小学校は、小学校四年の課程を終えた者に、二年く四年のさらに高い教育を施



腹痛公神薬師堂

すことを目的としました。国語・数学・地理・歴史・理科・修身・書道・綴方・図面・つづりかた体操のほか、女子に裁縫、男子に漢文や英語の初歩なども教えたようです。当初は、高松南部唯一の高等小学校として、北は庵治から南は両植田にかけて広い範囲の子弟が通学していました。しかし、当時は小学校を卒業すれば仕事に就くのが普通で、時間的・経済的に恵まれた者でないと就学できませんでした。

明治三〇年（一八九七）に庵治・鴻元・古高松が組合より分離し、明治三十四年に木太・西植田・東植田、明治三十八年に前田・三谷も分離して、川添・坂ノ上・林・十河の四か村立となりました。

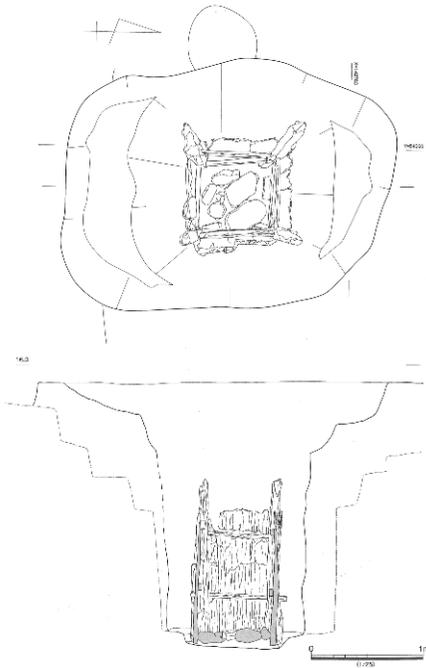
明治四〇年の勅令により、小学校の修業年限は六年、高等小学校は二年となったことに伴い、翌年四月、坂ノ上尋常小学校に高等科を併置して、坂ノ上尋常高等小学校としたため、上田井高等小学校は廃校になりました。



上田井高等小学校所在地石碑

14 おおなだ 大灘遺跡

由良南原遺跡同様、一二〜一三世の集落跡です。建物を構成するような柱穴は認められなかったですが、井戸跡が二基検出されています。そのうち一基は、井戸の四隅に柱を立て、棧で固定し、周囲に縦板を巡らす木組みの井戸です。



大灘遺跡検出木枠井戸

15 かまくらいちがく 鎌倉一学と由良角力士俵跡

鎌倉一学は明暦三年（一六五七）、地元の名門南部家に生まれました。鎌倉五郎景政の末裔と言われ、文武両道に優れた武人であり、豪力無双の力士として勇名を馳せた人です。一学には巨人怪物との決死の一番勝負など面白い伝説がいくつも残っています。

当時は、田舎角力が大変な人気で、各所で祭礼には奉納相撲が催されましたが、一

学の出現により由良角力は遠く中国・四国の人たちまで知られるようになり、その後、長年にわたって全盛を極めたと伝えられています。平成四年（一九九二）に、その土俵跡に石碑が建立されました。

16 採石場跡

由良石は柱状節理からなる黒雲母安山岩からなり、熱に強く加工しやすいことから、かつて採石が盛んに行われていました。年号入りの由良石製品で最も古いものが清水神社と蓮勝寺の境内にある手洗石で、共に元文二年（一七三七）と記載されていることから、採掘され始めたのは、江戸時代中期頃と考えられます。最初は、地元の人たちによって山の数箇所採石場がつくられ、主に石垣や住宅の基礎石として近隣地域で使用されてきました。江戸時代末期になると各地から石工職人が流入し、しだいに製品も多様化し、墓石をはじめ寺社用の燈籠等が盛んにつくられるようになりました。近隣の墓地にはこの時代の墓石が多



由良角力土俵場跡石碑

く見られます。また、幕末には内伝秀蔵が由良石で多くの作品を製作しています。

明治から大正期にかけては耐火性に優れるということから、土地造成の石垣や建物基礎石に欠かせないものとなり、墓石と並んで大きな役割を果たしてきました。

そのほか、からうす唐臼・ひきうす碾臼・もちうす餅臼など生活必需品などの製品

も作られるようになりました。また、由良石の特徴は雲母安山岩特有の暖かい温もりで、淡青色と淡褐色の落ち着いた色合いから受ける上品な感覚は建築材料として

急速に人気が高まり、東京帝国ホテル・歌舞伎座・東京帝国大学付属病院・名古屋市役所等に多量に使用されました。地元を中心とした土木資材から建築装飾資材として広く全国的に評価され始め、活気にみちた日々が続きました。

由良山を揺り動かすほどの活況も、昭和一四年（一九三九）頃から戦時色が濃くなり、若い石工は軍隊に招集されたり、軍事工場に徴用されるなどし、採石は衰微の一途をたどりました。



清水神社手洗石（元文二年銘）

戦後になると、荒廃した国土の復興に石材が多く用いられ、採石場や石工が激増し、再び活気を取り戻しました。最盛期の昭和三十五年（一九六〇）頃には由良山に四〇事業所があり、従業員数は百名を越す勢いでした。このような情勢の中で、生産・流通の近代化が一举に進められました。槌つちの代わりにエアハンマー、大八車に代わって大型トラックが利用されるようになりました。特に東讃方面の河川改修に多量の石材を要し、同時に民間住宅の建築が増加しました。

由良石の歴史の中で欠かせない画期的な大事業が、皇居東庭（宮殿広



皇居東庭敷石

場) 約一万五千平方メートルの敷石施工です。由良石特有の淡青色と淡褐色の二色が織りなすモザイク模様が平和を象徴する色彩としてぴったりであること、敷石の上を歩行する際のタッチが非常にソフトであることが高く評価され、受注が決定しました。昭和四十一年(一九六六)一月二十一日に採石場において新宮殿造成用採石奉告祈願祭の神事が行われ、大事業の槌入れが行われました。近代化を進めると共に優先集中生産体制に全山が結集し、昭和四十三年(一九六八)に竣工しました。

しかし、戦後三十年間の採掘量は由良石全採掘量の八〇パーセントになり、良質な石材が採り尽くされ、生産量が激減すると共に、輸入石材の増加、コンクリート業界の躍進等により採石業は衰退の一途をたどりました。



採石場跡

17 防空壕跡

昭和一九年（一九四四）一月二十三日、木田郡林村に陸軍の飛行場建設が決定し、同年八月には滑走路が完成しました。これに伴い、由良山にも山麓から中腹にかけて数多くの塹壕ざんこうや防空壕が掘られ、山上には高射砲が設置されるなどの要塞化が図られ、飛行場の戦闘機を隠すための掩体壕えんたいこうや誘導路等の整備も行われました。

参考文献

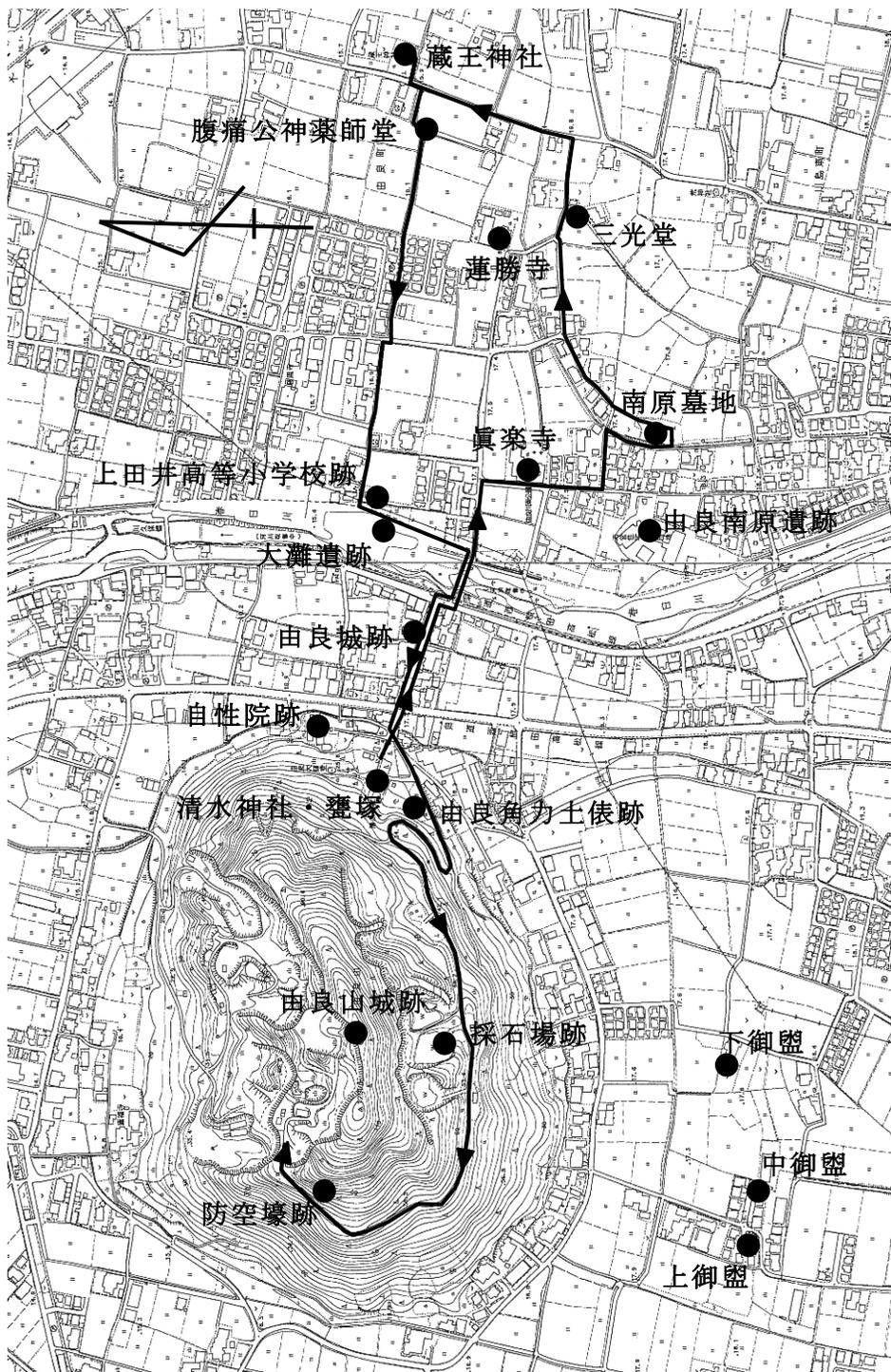
- 香川県教育員会二〇〇八『大灘遺跡』
川島郷土誌編集委員会一九九四『川島郷土誌』
高松市教育委員会二〇〇二『由良南原遺跡』
高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会一九八二『古城跡を訪ねて』



防空壕跡



幕末期の由良山周辺の景観（『讃岐国名勝図会』より抜粋）



9月25日(日) 由良町からの復路

ことでんバス 【62】サンメッセ・高松駅行き】

(由良バス停) (瓦町・天満屋バス停)

12:20 発 → 12:46 着

12:43 発 → 13:09 着



次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 岩部八幡のイチョウと周辺を訪ねる

とき 平成23年10月23日(日)

9:30～12:00

集合場所 塩江中学校前

講師 藤沢 秋義(高松市歴史民俗協会常任理事)

☆広報「たかまつ」10月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆天候等により中止の場合のみ文化財課(TEL 839-2660「午前7時～開始時間まで」)でお知らせします。

(電話が通じない場合は、「実施」です。)



★集合場所への交通案内★

ことでんバス 【53】栗林公園・塩江行き】

瓦町・天満屋バス停 中学校前バス停

8:35 → 9:22

7:45 → 8:32

「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょ
う。
(必ず、歩道を歩き、歩道が無いところでは、道
路の端を一直線で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょ
う。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょ
う。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気
をつけましょ
う。
- 5 文化財や自然を大切にしましょ
う。